

# サミュエル・スタンホープ・スミス

——『試論』にみられる人種観について——

清水 忠 重

## はじめに

人種の優劣の問題はニグロ奴隷制をかかえる南北戦争前のアメリカ人にとっては、ひとつの関心事であったに相違ない。『旧約聖書』の「創世記」には周知のように、人祖アダムとイヴから十代目の子孫にあたるノアの三人の息子たち、すなわちセム、ハム、ヤペテ以後、地上の三大人種群が分岐したという人類の一大系図が描かれているが、これはいわば単元論 (monogenism) と呼ばれる立場に相当するものであって、諸人種の起源を単一の人祖へと帰することによって全人類の本来の同胞性を語っているといえる。そこには各々の人種を共通の種 (species. ヒト種) に下属する亜種 (subspecies) ないし変種 (variety) とみなす思想がすでにイムプリシットな形で表明されているとみてよく、この立論の前提からした場合、ニグロの人種的な劣等性や人種不平等の思想を導き出すことはおよそ困難である。また奴隷制擁護の積極的な基礎づけをここに期待するのも無理であろう。<sup>②</sup>

今ひとつの立場は多元論 (polygenism) と呼ばれる見方であるが、これは地上の各地に複数の相異なる人祖があったと想定し、人種間の差異といったものも人類誕生の初発からすでに存在していたという説を立てる。したがって人種の特徴といったものは——価値観をこめてもっと言えば、人種間の生物学的優劣といったものは——先天的・内在的な資質に由来すると見做されるわけであって、それはいきおい人種不平等の思想へと帰着しやすい。スウィーピングな一般化はもちろん危険であり、多元論者かならずしもニグロ奴隷制のイデオログであったとは速断できないが、人種の資質的優劣といった点にひとがア

クセントを置く限りにおいて、それがかの「奇妙な制度」の正当化につながりやすいことは見やすいところであろう。<sup>③</sup>

南北戦争前夜においては単元か多元かの問題は、たんなる人類学的な興味をこえて奴隷制論争の方へと収斂し、その一環としての意味を濃厚に帯びていった。だがその初期の段階、つまり19世紀初頭までの経過を見るならば、この問題はむしろ宗教と科学との対立という叙上とは別個のダイメンジョンにおいて取り上げられ、その論議も専らこの後者の連関でなされるのを常としたように思われる。対立の図式を簡単にあらわせば、一方に聖書を奉じその単元論の立場に固執する宗教家のグループと、他方に顔面角・脳容積の測定などの科学的手法を駆使して聖書の記述に異をたてる多元論者のグループ、というように一応定式化されようが、いずれにしてもここには宗教と科学との、あるいは信仰と理性との確執という歴史上繰り返し現われかつ議論を呼んだあの対立抗争の一パターンが蔵されていたといえる。

アメリカにおけるこの単元・多元の論争史のなかで、その代表的論客を問う場合、ひとがまず第一に指を屈すべきはサミュエル・スタンホープ・スミス (Samuel Stanhope Smith. 1751—1819) なる人物であろう。かれの主著『人類の皮膚の色および姿態の多様性に関する一試論』<sup>④</sup> (1787) [以下、『試論』と略す] は単元論の所説を体系的なかたちで提示した嚆矢ともいうべき労作で、それは単元・多元いずれの説を擁するにせよ、その後の論客たちが避けて通ることのできない記念碑的な業績として、いわば論争の出発点を画するものとなった。史家 D. ブアスティンがこれを「自然人類学に関してこの期のアメリカ人がなした多分もっとも野心的な探究」と評したように、この一書は建国後まだ日も浅い共和国にあって、旧世界の学問水準に照しても決して遜色を感じさせぬだけの豊かな内容を備えていた。当時のイギリスの多元論者 C. ホワイトは一方では『試論』を批判しつつも、他方ではその著者を「当代随一の著述家のひとり」と評したのであって、この期の英米の文化的・学術的水準の大きな落差を考慮にいれるなら、この言葉はおよそ論敵に対する最高級の賛辞だったことが分かるであろう。<sup>⑤</sup>

スミスが『試論』を執筆したのは啓蒙主義の時代と呼ばれる18世紀後半の一時期にあたっているが、それはいわば合理的思考の高まりを前に聖書の権威が日ごとに低下しつつあった時代であった。例のフランクリンによる嵐の実験をはじめ、地震観ひとつとっても、いまや従来のように超自然的力の仕業であるとする見方に代って、地殻の変動といった説明づけが持ち出されるなど、一連の自然現象に対して人々は次第に科学的・合理的な解釈へと目ざめつつあった。啓示宗教の命題は自然科学によって幾多の面で疑問符を付されつつあったといえる。ところでスミス自身に関していえば、彼は長年のあいだ長老派牧師として福音伝道に従事し、その後ニュー・ジャージー大学（College of New Jersey）学長をも務める保守的タイプの知識人であって、彼が『試論』のなかで手がけたのも他でもない、聖書の正統的解釈である単元論の論証というテーマであった。そこには宗教の復権を図ろうとする一種の護教的な意図が盛り込まれていたとみてよい。

スミスはこの場合、人種群がいかにして誕生したかというその分岐の原因を説明することによって、人類原初の祖先は一つであったという単元論の命題を裏から論証しようと試みたが、彼に課せられた課題はこれに尽きるものではなかった。自分の所説を啓蒙的合理主義の風潮に拮抗させるためには、さらに論証方法それ自体の問題として、たとえば従来の神学者のように聖書の記述を無誤謬のものとして、それもトートロジー的に引証するのではなく、むしろ人々の理性をこそ充分納得させうるような、いわば聖書主義とは別個の方法に基いて聖書の立場を守る必要があった。

本稿では以下、スミスがこれらの課題にどう対処し、どのような形の人種形成の論考をものしたか、またそこには直接間接にどのような人種観が窺われるかといった点を取り上げて検討を加えてみたい。

---

『試論』の内容をまず概略的に紹介しておこう。

人種形成の原因を論ずるにあたって、スミスは人間の身体に外部から影響

を及ぼしてくる要因として、(a) 気候 (climate), (b) 社会状態 (the state of society), (c) 生活様式 (the manner of living, the habits of living) の三つの要素を挙げている。これらの中でも特に重視されるのは気候であり、常識的な見方ではあるが緯度と人種の皮膚の色との間には「かなりの規則性」があるという。(b)の社会状態という言葉は、そのなかに「食事、衣服、住居、風習、政治、芸術、宗教、農業上の改良、商業活動、思考習慣およびあらゆる種類の思想」といった極めて広範かつ雑多な領域を含んでおり、それは(c)の生活様式ないし生活習慣をすでに内容的に覆っていると見てよい。事実これら両者は名称のうえでは区別されつつも、本論では一括して論じられているようである。<sup>⑥</sup>

外的環境の働きかけと並んで重視されるのは、人間の身体そのものが「独特の柔軟性」を備えており、外界の刺激に対して驚くべき適応能力を持っているという点である。「人間の体質は動物のなかでも最も繊細であるが、それはまた最も柔軟であり、このうえなく多様な状況変化に適応しうるものである」。気候ひとつ取り上げてみても、人間のエクメーネは赤道から両極圏にいたるあらゆる気候帯に及んでおり、この点他の動物との著しい相違を示すが、しかしまたその柔軟性のゆえに人間は環境の影響を受けること最も大であるという。<sup>⑦</sup>

環境のなかで陶冶された獲得形質がその子孫にまで遺伝するという考え方も、スミスの人種形成論のなかでは一つの核心をなしており、彼はラマルクと同様、後天的なものが遺伝的な特性に化すと考えていたようである。この説を最初に表明したのは医学の祖ヒポクラテスであるが、スミスはこの古代の学者の著作中、次のような事例を見出している。すなわち、黒海沿岸のマクロケファリなる部族の間では細長い頭形が高貴のしるしとされていたため、乳児期に包帯をまいて頭部を圧迫する風習が生まれたが、この人為的な頭蓋変形の習慣が幾世代も繰り返された結果、彼らの頭骨は変化をきたしたという話である。これに類する例として『試論』は中国のてん足などにも言及している。いずれにせよ歴史上さまざまな国では、それ固有の美的基準に合わせて人間の姿態に作為を加える習わしが行なわれてきたわけだが、それらは「当人だけに作用するという一般の想定に反して、その影響を後世にまで及ぼさずにはおか

ない」。そしてそこに「人種の遺伝的特性」(an hereditary property of the race)<sup>⑧</sup>なるものが生れる理由もまたある。

環境の及ぼす影響、それに対する身体の「独特の柔軟性」、そして獲得形質の後世への遺伝、これらが要するにスミスの所論の骨子をなしているといえるが、一応かれ自身の言葉でもって以上の事柄を結論づけていえば、次のようになろう。「私は気候やさまざまな生活様式および社会状態が、人類の皮膚の色と姿態に及ぼす影響について簡単に検討してきた。そしてその中でわれわれは、人間の柔軟な体質がもっとも微小な原因の作用からさえも数多くの変化を蒙りやすく、またこれらの作用を長期間、反復的に経験していると、ついには本来同一であった人類の間にこのうえなく顕著な相違が生じうることを見てきた。外界の及ぼす作用は一世代から次世代に移るにつれて増大し、身体がその影響力<sup>⑨</sup>にもはやそれ以上染まりきれぬ地点にいたるまで続く」。

『試論』に見られるこうした見解を、今日のわれわれがその輪郭だけを取り出して眺めるなら、それはある意味で常識的であり、素人的な印象さえ受けるかも知れない。だがそれはともかくこのスミスの思考態度のうちにひとつの大きな特徴を見出すとすれば、それはその発想の環境決定論的な性格という点であろう。これに関する事例は『試論』の随所に見出されるが、その極端な一例としては、たとえばアメリカのニグロ奴隷は自然および生活環境の変化から、次第に白人へと変貌を遂げつつあるといった観察が挙げられよう。スミスはいう。ニグロはアフリカを離れたことによって、「あの見た目にじつに不快な感じを与える諸特徴を徐々に失ないつつある」。ニグロ奴隷を炎天下で苛酷な重労働にたずさわる野外奴隷と、主人のもとで上等な衣食住をあてがわれている屋内奴隷とに分けると、このことは当然後者の場合にあてはまる。すなわち、「前者は一般に不格好である。彼らはアフリカ人特有の唇、鼻、頭髮の形状を大部分とどめている。彼らの精神は愚鈍であり、その表情は物憂げで愚かしい。後者はしばしばすらりとしていて、よく均整のとれた肢体を備えている。彼らの頭髮はしばしば三、四インチ、また時にはそれ以上縮むことなく伸びている。口の大きさと形は多くの場合、見苦しさを与えることはなく、時には美しくさ

えある。彼らの目鼻立ちは整っており、能力にも秀で、かつ表情は生氣に満ちている<sup>⑩</sup>。要するにここには骨格や毛髪<sup>⑪</sup>の形状をはじめ、精神的な資質までもが生活環境の所産であるかのような考え方が端的な形で示されているわけだが、しかもスミス<sup>⑫</sup>の見るところ、こうした身体上の変化はわずか一世代で生じることもありうる。彼が実際に観察したヘンリー・モスというニグロは、僅々七年で皮膚の色が「濃黒色」から「明色の健全な白」へと変質し、毛髪も球状毛から波状毛へと変化して、当時話題を呼んだという。またスミス自身が学長を務めるニュージャージー大学にまなんだインディアン青年の場合には、学業修得の数年の歳月のあいだに口、唇、頬骨、肌色、顔の輪郭など、あらゆる点が大きく変わったという。スミスはこうした事例から、もしアングロ・アメリカンとインディアンとを幼年期から同一の社会状態に置くならば、両者は青年期に達するまでには同一の身性を有するにいたるであろうという「絶対的な確信」を引き出している<sup>⑬</sup>。

環境決定論的な物の見方は当時としては普通であり、それはこの時代の一般的な通念であったともいえるが、スミスの『試論』はその主張の徹底性という点ではきわめてユニークであった。気候が人種の皮膚に影響を及ぼすという仮説なら常識の域を出るものではないであろうが、スミスのようにこうした立場を徹底させて、ニグロやインディアンなどの人種が生活環境の変化だけで白人に変わりうるなどと主張したものは、多分この時期としても珍しかったに相違ない。『試論』には身性上の特徴をまえて規定するような潜在的資質などという要因は、一切認められていない。身体にもし内在的な因子なるものが先天的に備わっているとすれば、それはどの人種にも共通な「柔軟性」という極めてネガティヴかつフォーマルな特性のみであって、個々の具体的な特徴は環境の働きかけをまって初めて彫像される。つまり身体的な諸特徴は環境の反映函数にすぎないという思想が、『試論』を流れる基底低音をなしている。今ひとつ引用を重ねるなら、たとえば次のような言葉である。「心をよぎるどんな考えや情感といえど、なんらかの程度において容貌——これは感情のインデックスのようなものである——に作用を及ぼし、その無限に多様な目鼻立ちをつ

くるのに貢献する」。「心をよぎるどんな激情、情感、思考といえど、それ独特の現われ方をする。そのつどの一筆——と表現しておこう——は極めて軽く、ほとんど感知しえないものかも知れないが、頻繁に繰り返されているうちに、ついには明確な輪郭をその顔に刻みつける」。あるいは、「心地よい開墾のゆきとどいた景観は顔かたちを生き生きと活気づけ、それを端正かつ温和なものにする。未開の寂莫たる森林は、それ自体の粗野なイメージを顔かたちの上へと刻印する<sup>19</sup>」。後述するようにスミスは單元論の論証を、できるだけ経験的・帰納的な手法でもっておこなおうとしたのであったが、ここではむしろ演繹的な姿勢を感じさせるほどに、環境決定論的ドグマが固執されているといわねばならない。

## 二

『試論』の概略は以上のとおりであるが、この著作を人種主義との関連でみた場合、どのような評価が下されるべきであろうか。史家フレドリックスンもいうように、スミスの立場を「20世紀的な意味での完全な人種上の平等主義者」と規定しえないことは明らかであろう。ビュッフオンやブルーメンバッハと同様、彼はカスピ海周辺の間人がその容姿において最も美しく、コーカサス人種に見られるその完全な均整とプロポーションこそは、造物主ほんらいの意を体現するものであると考えていた。ニグロやインディアンなどの人種は彼にとっては、白人という人類本来の規範的型からの退化ないし墮落、すなわち、「奇形」(“deformity”)でしかない。『試論』は白人という優秀人種に比して、ニグロの姿態が極めて「不格好」(“deformed”)であることに随所で言及している<sup>20</sup>。

こうした白人優位の思想は、スミスが論敵に対しておこなった批判の仕方のうちにも垣間見ることができる。この当時の解剖学者たち、たとえばオランダの P. カムペル、イギリスの J. ハンター、C. ホワイトらはニグロの先天的な劣等性を一方で説くかわら、その論拠として「序列」(gradation)あるいは「存在の偉大な連鎖」(the Great Chain of Being)なる観念を持ち出して、

自然界の生物に秩序立ったヒエラルヒーが存するのと同じように、人間であっても下等から高等への漸進的な序列が存在し、それは顔面角（facial angle）の大小と密接に照応していると説いた。この当時流行したこうした思想に批判を加える場合、スミスの前には二つの道があったはずである。すなわち、ニグロの顔面角は白人と比べて決して小さくはないのだということを、実際の測定値でもって論証して見せるか、あるいはまたそれが事実問題として不可能なら、顔面角などという外形的な要素は人間の精神的営みの高低とはまったく無関係なものにすぎないという思想を正面切って打ち出すか、のいずれかであったろう。だが惜しむべきことに実際の彼はこのいずれの方法をとるでもなく、むしろ論敵の準備したアリーナへと降り立って、ニグロの顔面角はより高度の白人の数値を目指して徐々に変化しつつあると述べることによって、これへの反論に代えてしまった。顔面角であれ何であれ、彼にあっては白人と同じ形態に近づくということが暗黙の進化と見做されていたふしが多分にある。<sup>⑭</sup>

このこととは矛盾するが見方を変えるならば、スミスはまた今日的な意味での人種主義者でもありえなかった。はじめに触れたように彼の單元論の立場は同一の人祖を想定するところから、人種平等の思想を予想させるものをすでに何ほどこ含んでいた。またその環境決定論的な立場もこの方向を助成するうえで大きな役割を演じたと見てよい。こうした点はジェファソンの『ヴァージニア覚え書』と比べるととき明らかとなろう。周知のようにジェファソンはインディアンについては、彼らがすぐれた絵画的素質なども萌芽的に備えており、「また最高級の雄弁でわれわれを驚かせるが、それは彼らの推理力や感情がなかなか強いものであり、その想像力も強烈で気品があるということを立証している」として、極めて好意的に論じた。だがニグロの評価はこれとはまったく対照的であり、彼らは「記憶力」の点では白人と同じだが、「推理力」ではかなり劣っており、「想像力」となると「鈍く下品で異常」ですらあるという。しかもそのニグロの「劣等性は単に彼らの生活条件の結果だけではなく、つまりニグロと白人の「相違を生み出したのは彼らの置かれた条件なのではなく、  
ネイチャー自然の力（本性）なのだ」と断定して憚らない。<sup>⑮</sup>



スミスの場合こうした内在的な論法を極力排して、その原因をもっぱら外的環境の中に求めようとする点に特色をもつ。すなわち、ニグロはアフリカにあっては苛酷な暴政の下に、また合衆国にあっては奴隷制という桎梏の下におかれていたがゆえに、その才能を陶冶し覚醒するに必要な自由・競争・称賛といった諸条件を欠いていた。インディアンがジェファソンのような才能を保持しているとすれば、それは彼らが独立した状態にあって狩猟や戦闘に従事しているからであり、もしニグロと同じ境遇に置かれるなら、その高貴な性格なるものも影をひそめてしまうに相違ない云々、と。こうした把握の仕方についていえるのは、たとえそれが現時点でのニグロの劣等性を認めているにせよ、その原因を人種の生得的な因子にではなく生活環境の「悲惨な状態」に帰しているという点で、きわめて環境決定論的な性格を有しているということ、したがってこれを今日的な意味での人種主義と同日に論じることとはできないということである。<sup>⑩</sup>

そればかりではない。スミスのように環境の影響力によってある人種が他の人種へと変化し、自然の景観までもが容貌に投影されるとする立場にあっては、所詮、固定化された人種類型の存立しうる余地など最初からありえないと言ってよい。彼が人種分類の仕事を軽視して、「さまざまな人種の間に厳密な境界線を設けるのは不可能であり、人種の数进行確に列挙することすら不可能であること、またそうした試みは本来無益だということ」を結論づけたのは、その立論にふさわしい帰結であった。<sup>⑪</sup> しかもさらに付言するならば、『試論』のなかに今日的な意味での人種概念なるものを見出すのは、そもそも無理ですらある。これまで一応われわれはこの著作を人種形成論のひとつとして紹介してきたわけだが、スミスが相違や優劣を論じているのは以上の所論からも推測がつくように、なにも人種に限ったことではない。社会状態と生活様式の影響を論じた箇所、彼は次のように言っている。フランスでは貴族、市民、農民等はそれぞれ特有の身体的特徴を有しており、一瞥しただけですぐそれと区別がつく。こうした意味での差異はイギリスの場合、他のヨーロッパ諸国ほど顕著ではないが、それはこの国が社会的な流動性に富んでおり、また貧富の差が少な

いことに由来している、と。<sup>⑮</sup>ここでスミスは階層間にもはっきりした身体上の相違があることを主張しているわけだが、われわれの注意を引くのはこうした白人社会内部での〈階層的な〉上下の違いが、そのままニグロと白人との〈人種的な〉違いへと直結させられ、これら両者が同質的なものとして、まったく同じ次元で論じられているということである。

スミスの念頭には一つの観念が暗黙のうちに前提とされていたように思われる。それはいわばある人間の姿態の優美さないし均整度は、かれが所属する人間集団の文化的な洗練度や文明の高低と密接に照応し合っているという見方である。スミスがアメリカのニグロは次第に白人労働者に近づきつつあると述べた時、それは〈野蛮人（ニグロ）——白人下層民——上流階層〉という漸進的序列づけの図式を念頭に語られており、この思想はニグロと白人との間に架橋しえない溝や断絶を設けようとするものでは決してない。ニグロの「不格好さ」はその人種的な属性に基づくものではなく、単にその生活・文化水準の低さに由来するに過ぎない。しかもこの点では白人下層民といえど、程度の差こそあれ同じなのである。<sup>⑯</sup>「粗食をはみ悪天候に晒されているため、野蛮人および社会の貧困階層の容貌はいきおい粗暴で無骨になる」という箇所には、ニグロという人種概念にかえて野蛮人なる言葉が用いられ、しかもそれが白人下層民と並置されているのを見るが、こうした語法はスミスの著作中けっして例外ではない。もともと先天的な資質の存在などを認めないのが『試論』の依拠する立場であってみれば、今日的な意味での人種概念などは原理的にいって構成しようがないのであり、むしろ時折スミスが使用した「野蛮人」(the savage) 対「文明人」(the civilized man), 「下層階級」対「上層階級」といった区分の<sup>⑰</sup>ほうが、彼本来の思想にとってよりの確な対置であったということになる。

いずれにしてもスミスのニグロ蔑視の中にわれわれは人種的な色彩を認めることはできないであろう。彼は白人下層民への選挙権賦与に関して、「平等の精神が……極端におし進められるとき、民主的共和国の原理は腐敗を蒙る」としてこれに反対し、また「財産の不平等」および「文官 (magistrate) と市民との身分上の不平等」に関しては、これをむしろ「万物の自然の秩序」のよう

に当然のことと見做していた。<sup>㉑</sup>彼のニグロ蔑視はいわばこうした愚民観の延長線上に位置するものであって、これら両者の間には質的な差異はなく、ただ上層階級からの距離的へだたりに応じた程度の相異なる蔑視が存在していたに過ぎない。

### 三

『試論』が書かれたのは啓蒙主義の時代と呼ばれる18世紀末のことであるが、そこに見られる単元論の論証方法には当時の知的風潮の影響が色濃く認められる。この点を抜きにして『試論』を語ることはできないであろう。スミスは一方では、彼が「自然科学の半可通」と呼んで軽蔑した科学者たちの台頭を快よく思っていなかったが、他方では彼自身、時代の思潮に深く染まっており、偏狭でドグマティックな正統派神学者とは違って自然科学の素養をも少なからず身につけていた。ニュージャージー大学の学長であった頃、彼は評議員たちの反対にもかかわらず、古典語の時間を削って自然科学を正規のカリキュラムの中にとり入れたことがあったが、これはこの種の試みとしては合衆国でも最初のものに属している。<sup>㉒</sup>また当時、コモン・センスを重視する経験論が J・ウィザースプーンによってスコットランドから伝えられたが、スミスはその直接の感化をも受けており、信仰者でありながらも聖書主義の方法よりは経験的な方法を重んじ、また演繹的な態度よりも帰納的な態度を尊重するという行き方をとった。つまりア・プリオリな想定を排して観察された確実な諸事実を提示し、「ニュートン時代以来の」科学的手法でもって迷信をただすことをその信条としていたといつてよい。<sup>㉓</sup>

ところで宗教と科学との確執という古い歴史的な対立を前にした場合、この当時の知識人には三つの選択肢が委ねられていたように思われる。すなわち神の啓示に反することはすべて拒否するか、あるいは合理主義的風潮に帰依して宗教を退けるか、それともこの両者を和解に持ち込み、その両立を図るべく心がけるかのいずれかである。<sup>㉔</sup>これらの中でスミスが選んだのは前述のところからもおおよそその推測がつくように、いわば折衷的ともいうべき最後の立場であ

ったが、こうした態度の一端は次の言葉の中に示されている。「ひとは人類の間に今日みられる皮膚の色と姿態の多様性が、気候・社会状態・生活様式の影響に由来するものである」という信念を採用するか、あるいはそれとも複数の人種が最初から創造されていて、ノアの家族以外にも洪水を逃れた者たちがいたと考えるか、のいずれかを採らねばならない。ひとは哲学者 (philosopher) となるか不信心者 (infidel) となるかの二つにひとつである<sup>26</sup>」。ここでスミスの言わんとしていることは明らかであろう。彼は自分が哲学者——すなわち科学者——でもあり、かつ同時に信仰者でもあるような立場を目指していることを表明することによって、一方では信仰が、他方では合理的精神がそれぞれ独自の基盤から異質のロイアルティーを要求していたさなか、そのいずれを退けるでもなく、むしろ宗教的真理と科学的真理とは一致するとの信念のもとに、その双方に忠実たんとしたわけである<sup>26</sup>。「真の哲学はこれまで常に真の宗教の盟友であった」。「真の宗教と真の哲学とは究極的には同一の原理に到達するに相違ない」<sup>27</sup>。哲学(科学)と宗教に関するこうした表現は『試論』のなかでも特に頻繁に出てくるものであるが、それは古い信仰の価値を新しい状況に見合うような形で守ろうとした態度のひとつの現われであったとみてよく、一史家が表現したようにそれはまた「啓蒙的保守主義」と呼ばれるにふさわしい立場でもあった<sup>28</sup>。

宗教と科学の対立におけるスミスの役割を客観的に見た場合、これを折衷的と規定しうることは叙上のとおりである。だが彼自身がそうした立場を意図的に目指していたわけでは決してなかった。というよりも、そうした妥協的志向は彼本来の主観的意図からはもっとも遠いものであったと言ってよい。科学上の研究成果は聖書の記述から逸脱するような帰結を一切含まないというのが『試論』を根底から支えていた信念であり、それはいわば神の万能と絶対性を前提にして初めて出てくる立場であった。スミスは次のように表現している。「自然科学がより深く探究されるにつれて、かつて科学がその無知ゆえに自然界のうちに見出していたあの聖書の記述との齟齬も次第に影をひそめていった」。「現実と自然の諸力に関するもっとも広範かつ精細な探究は、聖書の権威がわ

れわれに保証してきた諸事実を絶えずよりいっそう確証するうえで役立ってきた。正しい哲学はつねに真の神学と合致するであろう」<sup>29</sup>。ここで語られているのは、自然界のあらゆる事象は創造主たる神の御手になるという思想に他ならない。自然科学は宗教の敵対物というよりも、むしろ「宗教心への強力かつ驚くべき誘因」たりうるとするコトン・マザーのピューリタンの信念は、そのままスミス自身のものでもあった。<sup>30</sup>

『試論』にみられる單元論の論証は、これらの事柄を念頭において理解する必要がある。スミスは信仰者ではあったが、人類の歴史や出来事を神の摂理の実現と見做すような叙述スタイルは否定して、人種分岐の原因に関してもこれを「神の直接的な働きかけ」(a direct act of the Almighty) といった超自然的なものではなく、「自然の諸原因」(natural causes) へと帰した。<sup>31</sup>そしてこのような方法に彼がわざわざ訴えたのは他でもない、聖書の真理性を合理主義者をも納得させるような形で示そうとしたからであり、それはまた「敬神家たちは常に自己の所説を充分確実な諸事実ではなく、不確かな神の権威に依らしめようとする」という科学者たちの非難に応えるためでもあった。彼が目指していたのは宗教の権威を復活させて、その優位のもとに科学を従属させることであり、これら両者の乖離や確執などはおおよそ考えも及ばない事柄であった。

だがスミスの主観的な信念はともかく、彼の意図したところに関して言えば、それはその後の思想史の流れの中では結局、破綻をきたす運命にあった。彼は『試論』の劈頭で、この著作がなぜ宗教と関連があるのかをわざわざ次のように説明しているが、こうしたいいわけ自体がすでに宗教と科学との分裂ないし科学の自立化を予想させる響きを帯びている。すなわち、「本書の目的は人類の間に見られる多様性を自然の諸原因へと帰することによって、その単一性を立証することにあるのであるから、この書はモーゼ五書に語られている歴史 (mosaic history) の真実性を科学に確認させるという点で、宗教と明白かつ緊密なつながりを持っている」。あるいはこれに続いて次のような言葉も見える。「私は黙々たる(自然の)探究過程に宗教の権威を持ち込んだり、そうした権威でもっ

て論証の代用物となすがごとき態度は絶対にとらない。私は事実という明白な証拠と、これらの諸事実から帰結する結論——自然の研究者なら誰でもが、自然それ自体の源泉から正しく導き出されたと異存なく認めるであろうような結論——に訴えかける所存である」<sup>⑧</sup>。これらの言葉は スミスの所期の目的を裏切るようなトーンをすでにその中に含んでいる。確かに人種の多様性に関する彼の研究は、それが「創世記」の記述を事後的に確認するものであった限りにおいて、多分ひとびとの脳裡に敬神の念を呼びおこす一助となりえたであろう。だがもし万一、科学上の研究成果と聖書の記述とが合致しないなら、その時には一体どうなるのであろうか。また人類の歴史が聖書を援用することなく叙述されうるとしたら、自然科学という学問領域は聖書から完全に独立した自立的な妥当性を獲得することになりはしないか。単元論は多元論よりも真正の科学的原理により一致したドクトリンであると述べた際、スミスはわざわざそこに「神の啓示という権威から独立して」そうなのだと付言した<sup>⑨</sup>。また「哲学」（科学）とは彼の定義に従えば、「人間の精神的能力が啓示の光りの導きをかりることなく発見しうる、そのぎりぎりのところまで、物質および精神界の双方にわたって自然の本質と法則を探究すること」であり、「真理」とは「慎重な広範囲にわたる諸事実からの帰納によってのみ」到達されうるものであった<sup>⑩</sup>。

こうした態度にあっては畢竟、科学の自立化を防止しうるような絶対的保証などどこにも求めえないことは明らかであろう。スミス自身は自然界の探究が神の摂理の発見につながると考えて、科学と宗教を一元化して考えていたかも知れない。だがその主観が如何ようであろうとも、彼が信仰者でもありかつ科学者でもあろうとした限りにおいて、その二元的立場は覆うべくもない。しかもそこには彼の期待を裏切って、信仰（宗教）と理性（科学）の乖離という自己解体のモメントが蔵されていた。前述した科学認定のカリキュラムの件で、長老派の大学評議員たちは学長スミスの方針に猛反対を試みたのであったが、そのとき彼らはスミスの路線の中にキリスト教教義を破壊に導びく潜在的な契機を読み取っていたのではなかったか。あたかも13—14世紀以後のドゥンス・

スコトウスやウィリアム・オッカムなどの二重真理説の立場が、主体的な信仰上の真理と自然現象についての客観的な理性上の真理とを区別して、中世スコラ哲学を内部崩壊させ、そこから科学の自立化を準備していったのと同じように、スミスの『試論』もまた似たような経過をたどりつつ同様の帰結を導き出したのであった。

## お わ り に

スミスの著作は以上みたとおりであるが、当時の学説史的な脈絡のなかでみた場合、単元論というその立場自体は別段、目新しいものではなかったかも知れない。リンネ、ビュッフオン、カント、ブルーメンバッハ、キュヴィエをはじめとする18世紀ヨーロッパの指導的な学者たちはいずれもこの学説の信奉者であり、この時期、あえて多元論を唱えたのはイギリスのゲームズ卿のような知名度の点ではるかに見劣りのする人物でしかなかった。人種の分岐をめぐる説明づけに関しても、すでに単元論者の間では、(一)自然および社会環境が人種の相違を誕生せしめたとする環境決定論的な立場と、(二)遺伝の過程で突然変異が現われ、それが優勢化してひとつの人種をなすにいたったという説との間で論争が交わされていた。そして、よりドミナントな地位を学界で占めていたのは前者の方であって、スミスもこの系譜に連なる一介の論客にすぎなかったとい<sup>①</sup>ってよい。しかしすでに言及したように論旨の一貫性という側面を取り上げてみるならば、スミスはきわめて徹底した形の環境決定論を示したとい<sup>②</sup>てよく、この点ではたぶん当時のどの論者にもまして自己の論理を忠実に追ったように思われる。生活環境の変化がニグロを白人へと変貌せしめるといった、かなり無謀と思われる主張や事例についてはすでに触れたとおりである。かつて史家スタントンはスミスの思考態度を評して「純粹の環境決定論」と規定したことがあったが、要するにそこにはこの立場が究極的に打ち出さねばならぬところの主張内容が理念型化された極端なかたちで示されているとい<sup>③</sup>ってよい。

『試論』の知的背景のひとつとして、上のような物の見方が独立革命期のアメリカ人にとりわけ魅力的であったという点にも触れておく必要がある。ひ

とが万人の平等や自然権を口にする場合、人間のあいだに見られる相違や差別は本質的・生得的なものではなく、たんに社会環境という人為的・偶然的な諸原因の結果にすぎないとする見方は、きわめてうってつけであった。またこの時期ひとびとの関心は古い信仰の解体とともに、たましいの救済といった人間の内面劇をはなれて、次第に社会環境の変革という外への方向を目指しつつあった。人間の精神に内在するという「生得観念」(innate ideas)を否定し、人知はすべて「外的感覚」(sensation)と「反省」(reflection)を通してのみ得られるとするジョン・ロックの哲学は、こうした風潮の知的なジャスティフィケーションでもあった。そしてもし「環境決定論の隆盛は、じつに18世紀後半の歴史的発展の主要な一局面をなしていた」とするならば、それは独立革命直後にものされた『試論』においてこそ端的な表現を見出したというべきであり、この書は草創期の共和国にみなぎっていた「特別な信念」を代表する、まさに「環境に対するアメリカ的信念の記念碑」であったといわねばならない。<sup>③</sup>

このことと関連するが、スミスの思想はそれを人種主義との関連で評価した場合、ジェファスンと対極的な位置を占めていたといえる。史家フレドリックスンが最近の著作で述べたように、アメリカ人の人種的偏見は奴隷制とともに古くからあったかも知れないが、啓蒙思想の一特徴をなす環境決定論が強かった1800年前後の段階においては、差別意識の正当性を哲学的・科学的な装いのもとに主張する合理化されたイデオロギーは芽生えにくかった。「1780年代のアメリカ啓蒙思想の代弁者の中ではただひとりジェファスンのみが、ニグロは若干の基本的な資質の点で白人よりも多分劣っていると主張することによって、この方向へと歩を進めた」いわば例外的な人物であった。<sup>④</sup>だが『試論』においてはその徹底した環境決定論のゆえに人種主義と呼びうるような方向へは進みようがなく、立場が極限化されたばあい逆に「野蛮人」対「文明人」といった単なる文化的な対概念を導き出さざるをえなかったことはすでに見たとおりである。「人間の本性というものはあらゆる時代、あらゆる国を通じて同一である。美德と悪徳、知識と無知といった点に関してわれわれが人々のうちに認める違い



はすべて、気候・国土・文明の程度・政治形態あるいはその他、偶然的な諸原因<sup>⑩</sup>に由来するものとして説明されうる」。この言葉は独立革命期の1773年に B. ラッシュが記したものであり、スミスの思想と大きく重なり合う部分をもっているが、こうした立場が人種主義と無縁であることは繰り返すまでもないであろう。

スミスのうちに体现されていた宗教と科学の対立という今ひとつの歴史的なテーマは、その後どのような経過をたどったであろうか。スミス自身は倫理学畑の学者でありながらも、その論証に際しては経験的な諸事実を重視し、宗教的真理と科学的真理との一致をいわば自明の事柄として信じていた。しかし彼の主観がたとえそうであったにせよ、すでに見たように彼の準備した立論からする場合、科学の自立化を防止することはそもそも不可能であった。エマソンはジャクソン時代と称される彼の時代をさして「科学の時代」と呼び、科学についてはこれを「時代の支配的な影響力」という言葉でもって表現したが、こうした事態は、すでにスミスの晩年においてすら科学がテイク・オフとも呼ぶる著しい発展期にさしかかっていたことを意味していた<sup>⑪</sup>。人類学の学問としての成長史をかりに、(a)18世紀(1815年まで含む)、(b)ダーウィン以前(1815—1860年)、(c)ダーウィン以後(1860—1914年)、(d)20世紀(1914年以後)と四つの時期に分けるならば、(a)は学問がいまだ未分化な状態にあり、今日的な意味での専門的な人類学者と呼びうる人物などいなかった時代である。研究態度としてもどちらかといえば、事実を丹念に収集して、その範囲内でのみ確実な結論を引き出してくるというのではなく、概して思索の方が優位を占めていた<sup>⑫</sup>。しかし(b)の時期、つまりアメリカ史上「第二次独立戦争」とよばれている対英戦争(1812—1814年)以後の時期になると、いわゆる専門家と称すべき人々も数多く輩出し、科学者協会の設立や定期刊行物の発行といった制度的な体制が本格的な<sup>⑬</sup>かたちを整えてくることにもなる<sup>⑭</sup>。こうした上潮に乗って台頭するのが、いわゆる S.G. モートンを領袖とする人種学「アメリカ学派」(“American School of ethnology”)と呼ばれる多元論者の一団であり、彼らは今日でこそ擬似科学として一蹴されているが、当時としては画期的とも称すべき厳密かつ実証的

な研究態度でもって、聖書の記述を否定する方向へと大きく潮流を変えたのであった。<sup>⑬</sup>「ノン・ホワイツの先天的・恒久的劣等性を断定する 合理化された擬似科学理論」<sup>⑭</sup>がはびこり始めるのは、この人類学という学問の独立科学としての成長と時期的に並行していたといつてよい。そしてこうした趨勢は宗教に代って科学の、単元論に代って多元論の、また環境決定論に代って内在的・資質的決定論の台頭といったように、そのことごとくの点で論客スミスの論点を否定しざる方向へと導いていったのであった。

#### はじめにの註

- ① この思想は具体的には「創世記」3の20、9の19、10の32に、また『新約聖書』では「使徒行伝」17の26に見える。
- ② これに関しては若干の保留が必要である。というのは奴隷制の是非に関していえば、じつは聖書には相反する二つのモメントが包蔵されていたと見るべきであって、聖書に依拠する立場が必らず奴隷制の否定を打出したというわけではないからである。単元論の思想は確かにこの制度と背反するものではあったが、しかしこれと並んで聖書とくに『旧約』には、「レビ記」25の44—46のように奴隷の存在を容認する箇所がある。『新約』の方もポジティブな形では奴隷制の否定を打出してはおらず、南部の論客たちの中には、キリストと使徒たちはこの制度の廃止に明示的な形で言及しなかったという理由から、これに暗黙の肯定を与えたのだと解する者もいた。つまりいずれの側も自己の都合にあわせて聖書を利用できたということになる。
- ③ 例外的な場合に関していえば、たとえばチャールズ・コードウェル (Charles Caldwell) は *Thoughts on the Original Unity of the Human Race* (New York, 1830) において多元論を唱え、白人の知的優越性を説いているが、だからといって彼はニグロ奴隷制やインディアンへの撲滅を正当化したりするようなことはせず、むしろ劣等民族の保護を訴えた。逆にまたヴァージニア大学の教授 J. L. ケーベル (Cabell) のように、単元論を唱えつつも、そのかわらで奴隷制を弁護したような人物もいる。George M. Fredrickson, *The Black Image in the White Mind: The Debate on Afro-American Character and Destiny, 1817—1914* (New York, 1971), p. 73; Edward Lurie, "Louis Agassiz and the Races of Man," *Isis*, XLV (1954), p. 227.
- ④ Samuel Stanhope Smith, *An Essay on the Causes of the Variety of Complexion and Figure in the Human Species*, ed. Winthrop D. Jordan (Cambridge, Mass., 1965). 本書の初版本は1787年フィラデルフィアで出版されているが、1810年には倍加された形をとって現われた。本稿ではこの増補改訂版の復刻版を用いているが、これに

は W. D. Jordan の手になる極めて要を得たイントロダクションが付されている。(以下 “Introduction” として引用)。

- ⑤ D. J. Boorstin, *The Lost World of Thomas Jefferson* (New York, 1948), p. 66 ; W. D. Jordan, “Introduction,” p. xvii.

#### 一の註

- ⑥ S. S. Smith, *Essay*, p. 23, p. 27, p. 109, pp. 149—150.  
⑦ *Ibid.*, p. 8, p. 198. “its peculiar flexibility” (p. 8) あるいは “the pliant nature of man” (p. 125) といった表現が用いられている。  
⑧ *Ibid.*, p. 29, pp. 80—81, pp. 112—114. これに関してスミスは、肉体労働に従事する農民や下層民の子供たちの中には、しばしば手や腕が大きくよく発達した者が見かけられるが、それは獲得形質の遺伝によるものであると言っている。  
⑨ *Ibid.*, p. 125.  
⑩ *Ibid.*, p. 57, pp. 71—72, p. 105, pp. 152—153.  
⑪ *Ibid.*, pp. 58—59, p. 107.  
⑫ *Ibid.*, pp. 97—98.

#### 二の註

- ⑬ Fredrickson, *op. cit.*, p. 72, Smith, *op. cit.*, p. 41, p. 67, p. 69, p. 89, p. 121.

カスピ海沿岸の住民を最も完全なものと見做すこの見方にあつては、変化とは退化 (degeneration) の方向以外にありようがない。(もっともスミスのややあとに現われたアメリカの単元論者ジョン・バックマン John Bachman のように、ややニュアンスを変えて、白人は “original type” から “improve” したもの、ニグロは “degenerate” したものと見做すような例もときにある)。ビュッフォンは分岐すなわち退化の原因として、気候・食事・生活様式をあげ、獲得形質の遺伝を想定したが、ここで取り上げているスミスの説もこれに近いといえる。他方、ブルーメンバッハは獲得形質の遺伝にかんしては疑問符を付している。William Stanton, *The Leopard's Spots: Scientific Attitudes toward Race in America 1815—59* (Chicago, 1960), pp. 135—136; John C. Greene, “Some Early Speculations on the Origin of Human Races,” *American Anthropologist*, LVI (1954), pp. 33—34.

スミスのニグロ観に関していえば、かれは人種の分岐以前における人類の同質性を主張しつつも、環境の結果ひとたびできあがったニグロ人種なるものに関しては、それが白人に比べて劣っていることを認めていたということになる。つまり一方では生得的な劣等性を否定しつつも、他方では現時点での劣等性を認めていたわけである。Jordan, *op. cit.*, p. xlvi.

- ⑭ Jordan, *op. cit.*, pp. xxxiv—xlvi.  
⑮ Thomas Jefferson, *Notes on Virginia* (1782). 中屋健一訳『ヴァージニア覚え書』(岩波文庫), 252—256頁。

ジェファソンのこの著作には、奴隷制にたいする非難とニグロにたいする非好意的な見解とが並存している。そしてこの著作はすでにジェファソンの存命中から、ニグロの劣等性を論じたて人々によって引用されていたという点で興味をひく。Stanton, *op. cit.*, p. 55.

厳密に言えば、このなかでジェファソンは終始一貫ニグロの劣等性を生得的な資質に帰しているわけではなく、ときに環境決定論的な見方もとっている。(たとえば「彼らが今まで汚名を着せられてきた窃盗に走りやすいという傾向は、彼らのおかれている状況に帰せられるべきものであり、道徳上の感覚が墮落しているためと考えられるべきものではない。」257頁)。だがニグロ人種の劣等性にたいする彼の信念はやはり覆いがたいというべきで、その結果、本書「質問14」には「ニグロ問題にかんする彼の相矛盾した、そしてしばしば混乱した推論」(マッコリー)が繰広げられることになっている。同じ「質問14」のなかでも、その末尾に出てくる人民主権とデモクラシーにかんする彼の言葉が、きわめて楽観的・断定的な自信にみちた響きを帯びているのに対し、人種問題を論じたこの箇所は本書のなかでも最も歯切れが悪く、かつ論理的混乱の目立つ部分である。Robert McColley, *Slavery and Jeffersonian Virginia* (University of Illinois Press. Second Edition, 1973), p. 127.

- ⑩ S. S. Smith, *op. cit.*, p. 161, pp. 163—164. 厳密に言えば、このジェファソンの捉え方への批判は直接ジェファソン自身に向けてではなく、ジェファソンの著作を援用してニグロの劣等性を云々する C. ホワイトに対してなされている。その場合スミスは、ホワイトのいうニグロの「精神的能力の欠如」といった言葉を自己の文中に引用するにさいしても、“the supposed deficiency of mental talent” といったぐあいに形容詞 supposed を冠して引用するなど、表現自体にも注意を払っている。

- ⑪ Greene, *op. cit.*, pp. 32—33; Jordan, *op. cit.*, p. xxxi.

同じ環境決定論者でも19世紀なかばの J. バックマンや J. L. ケーベルになると、環境によって形造られた人種の特徴はいまや逆行しえない地点にまで定着しており、ニグロの劣等性是不変の事実と化しているとされる。自然は「アフリカ人種に恒久的な劣等性の刻印を押した」といった類の、一見、多元論者をおもわせるバックマンの発言もそこから出てくるわけである。こうした固定的な捉え方になると、もはやすでに環境決定論とはいいいがたいが、これに対してスミスの場合はきわめて柔軟であり、人種の区切りはいまだ顕在化しておらない。Fredrickson, *op. cit.*, p. 83; Shelton Smith, *In His Image, But……Racism in Southern Religion, 1780—1910* (Durham, Duke University Press, 1972), pp. 163—164.

- ⑫ S. S. Smith, *Essay*, pp. 100—104.

- ⑬ *Ibid.*, pp. 153—154, p. 157.

- ⑭ *Ibid.*, p. 98, pp. 122—123. *Essay* の p. 120 前後では問題はもっぱら “civilized” と “savage” との二つの形容詞の対比のもとに論じられている。

②① Jordan, *op. cit.*, pp. xxi—xxii.

### 三の註

②② S. S. Smith, *Essay*, p. 3 ; Jordan, *op. cit.*, p. xix ; William H. Hudnut III, "Samuel Stanhope Smith : Enlightened conservative," *Journal of the History of Ideas*, 17 (1956), p. 541. もちろん科学はこれ以前からアメリカの大学で教えられていた。スミスの新しさはこれに official institutionalization を与えたという点にある。

②③ Jordan, *op. cit.*, p. xii ; Hudnut III, *op. cit.*, p. 540, p. 545 ; S. S. Smith, *op. cit.*, p. 50.

②④ Hudnut III, *op. cit.*, p. 545.

②⑤ Quoted in Stanton, *op. cit.*, p. 21.

②⑥ Jordan, *op. cit.*, p. xlvii.

②⑦ S. S. Smith, *op. cit.*, p. 3, p. 21.

②⑧ Hudnut III, *op. cit.*, p. 542.

②⑨ S. S. Smith, *op. cit.*, pp. 148—149, p. 186.

③⑩ Jordan, *op. cit.*, p. xiv, p. xx.

③⑪ Josiah C. Nott, *Two lectures on the connection between the biblical and physical history of man* (originally published in 1849 by Bartlett and Welford. Reprinted 1969 by Negro Universities Press), p. 24 ; S. S. Smith, *op. cit.*, p. 3.

③⑫ S. S. Smith, *op. cit.*, p. 3.

③⑬ *Ibid.*, p. 3.

③⑭ *Ibid.*, p. 7.

③⑮ Quoted in Hudnut III, *op. cit.*, pp. 547—548.

### おわりにの註

③⑯ Greene, *op. cit.*, p. 32.

③⑰ *Ibid.*, p. 39 ; Nott, *op. cit.*, p. 24.

③⑱ Stanton, *op. cit.*, p. 9.

③⑲ Winthrop D. Jordan, *White Over Black : American Attitudes Toward the Negro, 1550—1812* (University of North Carolina Press, 1968), pp. 287—289 ; *Id.*, "Introduction," p. 1.

④⑰ Fredrickson, *op. cit.*, pp. 1—2.

④⑱ Quoted in Jordan, *White Over Black*, p. 287.

④⑲ Harry Hayden Clark, "Emerson and Science," *Philological Quarterly*, X, 3 (July, 1931), p. 225, p. 227.

④⑳ Greene, *op. cit.*, p. 31.

④㉑ これに関してはたとえば, George H. Daniels, *American Science in the Age of Jackson* (Columbia University Press, 1968) の Chapter I. The Pursuit of Science

in America, 1815—1845. を見よ.

④⑤ とくにモートンに関しては Stanton, *op. cit.*, Chapter III, “White Pepper Seed”  
を見よ.

④⑥ Fredrickson, *op. cit.*, p. xi.

## Summary

Samuel Stanhope Smith

Tadashige Shimizu

Are all human beings of one biological species? This is a momentous question in Revolutionary era. Theologically it bore upon the Christian doctrine of the spiritual unity of mankind in their common descent from Adam. And this was the period when the rationalist, deistic and materialist tendencies were coming to full fruition and a presumptuous science was wantonly attacking the citadels of revealed religion.

The Reverend Samuel Stanhope Smith's *An Essay on the Causes of the Variety of Complexion and Figure in the Human Species* was the most ambitious American treatise on physical anthropology in this period and it stands as a monument to environmentalism which was an underlying animus in the Revolutionary America.

All the races of man, he argued, were members of the same species and had a common remote ancestry; differences in color, temperament and morality etc. could be attributed to differing physical and social environments, especially climate and the contrasting habits of life produced by "savagery" and "civilization." His treatise was an attempt to reconcile rationalism and Calvinism, and its thoroughgoing environmentalism is one of the most typical viewpoint which refutes the innate biological inferiority of the Negro.